
手のひらの三日月

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひらの二日月

【Zマーク】

Z2339BA

【作者名】

紺とすん

【あらすじ】

針のムシロだった会社は結局クビ、人間関係も気がつけば干上がつていた。そんな冬のある日、たどりついた店で、男が両手を差し出してみせた・・・やや暗めでつじつじしますが一応ハッピーエンドの前中後編です。

今になつて思えば、仕事なんかより大切なものはたくさんあつた。友人とか付き合つていた人とか。もともとが忙しさを理由に切れてしまう程度の人間関係だったかも、ということについては正直あまり考えたくない。どちらにしても、自分が悪い。

要領がいい方ではないという自覚はあった。体よく管轄外の仕事をまで押しつけられているという自覚も。

それでも、もともとリソース不足の職場ではあつたから、残業残業休出の日々を私は受け入れていた。それで自分が必要とされるると思い込んでいたんだから、仕方ない。

いくら忙しくても時間を作つて遊べる人を、私は本当に尊敬してしまう。自分がそれをできないから。

ちなみに、仕事の内容はキャリアを標榜できるようなものではまったくない。いわゆる替えのきく仕事というやつで、私よりスマートこなせる人は、たくさんいるだろう。

それでも、入社三年目の秋までは、不器用なりに丁寧に、仕事の方はこなせていたと思う。ある日突然、自分の会社の吸収合併を知らされて、まったくアウェイな環境に放り込まれるまでは。

「バカ、ブス、おまえもう辞めろよ」

初顔合わせから一時間あまり。馴染みのないフロアで新しい上司は、私が提出したプリントアウトを指ではじきつつ、そんなことば

を放り投げた。放り投げた先にいたのは、まあ、私なわけだ。

私の何かが、彼をいらだたせたのだろう。あるいは、人員削減各一名のノルマが課せられていたのかもしない。とにかく、上司がそのたぐいの暴言をむけるのは、私に対してだけだった。私に対してだけ、暴言が執拗に繰り返された。

もともと疲弊気味の私の心に、小学生並みの語彙による暴言はかなりの破壊力を有していた。

一回バカと言わると、私は一倍バカになった。一回バスと言わると、私は一倍バスになった。

仕事のミスは逆に増えていき、身の回りのことにはじんじん気を配らなくなつていった。

胸の奥がずっと重く固まっていた。その上司の声が聞こえるだけで、肩がびくっと跳ねるようになつた。

それでも、自分から仕事を辞めることは考えなかつた。もつと頑張れば少しは事態がいい方に変わるはず、そう思い込んで、一分一秒をのりきることに専念した。叱責を受けると、指をぎゅっと固く握り込んで、暴言が心に入り込まないように耐えていた。

パワハラとして訴えるとか、それだけの前向きさがあれば、最初からこんな状況には陥らなかつたと思う。

あとひと月足らずで今年も終わるという、入社三年目の冬。「自己都合」という名目で一週間後の解雇がひつそり決まったとき、私はやはり、ほつとした。これでようやく、解放される・・・

でも、今の仕事から解放されてしまえば。

私には、何も残つていないのでした。

これといった特技も、気を紛らわすひとのやれる趣味も。遠慮なくグチをこぼせるような相手さん。
私はいつも、気づくのが遅すぎる。

あと一週間か・・・

どうせ辞めるんだから、仕事の方は適当にお茶を濁してしまえ、などと思えない自分の性格が恨めしい。

新しい人が派遣されてくるらしいが、多少は苦労が減るよつて、明日からなるべくわかりやすい引き継ぎ書を作りひつなどと黙つてる。そんなにいい子になりたいのか、私。

いやそんなつもりはない、はずなのだが、この融通のきかない性格をどうにかしないと、また同じことを繰り返しそうな気がする。

と、ここまで考えたところで、
またやってしまったことに気がついた。

ストレスのせいなのかどうか、この数カ月、今まで無意識にできていたことができなくなったり、子どもみたいな失敗をしたりで、ただでさえ重い気分がさらにへこむことがよくあつた。

たとえば部屋の鍵をかけ忘れるとかいった小さな生活上のことから、仕事に関するここまで、それはもういろいろ。

日常生活を普通に送るつていうだけのことが、どれだけ困難の連続だったのか、その事実にときどき愕然としてしまつ。

そして、今の状況はといえば いつのまにか私は、見覚えのない狭い路地を歩いているのだった。つまり、迷子または遭難。

会社から一人暮らしの部屋へ帰るだけのことなのに。

何百回と通った道筋なのに。

うあ、何百回とか思つたら鼻の奥がツンとした。そりや、会社に愛着がないわけはなかつた。だからといって、迷子になつた揚げ句に涙目つて、あんまり情けない。

氣を取り直して、誰かをつかまえて道を聞けばいいと思った。思つたがしかし、ぼんやりと暗い道に人の気配はない。急に心まで寒々としてくる。

歩きながらケータイを取り出して時刻を見ると、もうすぐ二十三時。位置検索つてどうやってやるんだっけ、と思つたところで、路地の先にどことなく見覚えのある赤い光が見えた。

思わず足早になつて温かな赤い光に駆け寄つてみれば、なんのことはない、それは何回か仕事帰りにお世話になつたこともあるラーメン屋の看板だつた。

頭の中になんとなく地図ができあがつて、こんなルートもあつたのかと感心する。同時に、空腹を意識した。

その店は年配の夫婦が切り盛りしている小さなラーメン屋で、一人でも比較的入りやすい雰囲気があつたのだが。

一週間後に無職になる自分が引き寄せられたのは、流行つているとはいえないラーメン屋か はあ。

でも、久しぶりに寄つていこうつか。あつたかいものが食べたいし。そう思つて引き戸を開けると、湿つた温かい空気に迎えられ、スープのいい匂いが鼻先をかすめる。

知らず肩に入っていた力が抜けていった。

「こいつしゃい」

あれつ、と思つたのは、「いらっしゃい」の声がいつもと違つたからで、ついにはその声の主、厨房に立っていたのが若い男だったからだ。いつもの店主夫婦も、客すらもいない。

「何になさいますか？」

ひどく丁寧な物言いに改めて男の顔を見ると、見覚えがあるような氣もある。が、思い出せない。バイトの人だらうか。

男は、スーツの上着とネクタイをとつただけ、のような格好をしていて、偏見かもしれないが、ラーメン屋には見えなかつた。シャツの袖をまくつて、長身の背をかがめて洗い物をしているところのようだが、その姿が店の風景にそぐわない。

なんといふかシャープな印象の人だ。が、かけている黒いセルフレームの眼鏡は、幅の狭いレンズが湯気で少し曇つていて、顔の上半分だけがほわつとしている感じだつた。

「あの、しうりゅラーメン一つください」

カウンター席に腰をおろしながら、いつもと同じものを注文した。

「しうりゅラーメン一つ、といつてもちよつと待つてくださいね。すぐにオーナーが戻つてきますから。実はちよつと手伝つてただけで・・・あ、戻つて來た」

「ああ、こいつしゃい」

裏口から直接厨房に入つて來たのだろう、いつものおじさんの姿が見えて、なんとなくほつとした。

「しょりゅーつけ」

男はおじさんになつて、洗い物を続けていた。やがておじさんが「助かったよ」と言つ声が聞こえて、男が厨房から出でると、一つおいて私の隣りの席に座つた。

それから視線を感じたので、思い切つて顔を向けてみた。曇りのとれた眼鏡の奥の瞳は、やはり私を見ていた。

「はー」

いきなり親しげな調子で彼はそつと、手のひらを上に向けて両手を差し出した。

反射的に、私も同じ動作をしてしまつ。

「うふ、やつぱり。Hデコムの第一営業部」

私の手のひらをひらつと確認すると、彼は私が辞める予定の会社名と、合併後の所属部署を言い当てた。

ああ、こんな識別のされ方は嫌だ。

どうして知つてるんだろうと、この疑問が浮かぶよつ前に、そう思つた。

三日月の形をした小さな爪跡が三つ。私の左手のひらに浮かんでる。

今は「じうじう」状態だが、手のひらの下半分が赤黒く腫れて「る」ともある。それよりはまだまだしだけぞ・・・暗い路地を通り、あるいはそれ以前から、無意識にやってしまったんだが。

気持ちに負荷がかかったときや不安になつたとき、爪を立てるようにして左手を固く握りこんでしまう癖が私にはある。
子どもの頃に注意されずつと治まっていたのだが、入社後にぶり返し、会社の合併後に定着してしまった。

こんな子どもじみた癖はあんまり認めたくない。せめて跡が残らないように、爪も短めに切つているが、どういうわけか、腕の方までむくんでしまうこともある。

会社でこの癖を指摘されるようなことは、今までなかつたのに。

「『めん。無神経な』ことやつちやつたみたいだね」

先ほどの親しげな調子は引っ込んで、謝る彼の声音は抑制的なものだった。こちらの方が地なのだろうか？

とにかく本気で謝つてくれていることは分かつたので、私は首を横に振つた。

「別に、謝つてもうないことじゃないですから。でも、どうして？」
「いや、こういう所が欠けているんだ、俺は。怒つていいから。といふか、怒りつけよ」

そんなこと言われても困るだろ？、普通は。

「俺はね、先月まで第一営業部にいたんだよ。それで、何度も廊下なんかで見かけたことがある。その、手のひらが痛いんじゃないかなって気になつて、最初はどうちかつていうと顔とかより拳の方を見てたんだけど」

会社の私の席があるフロアには、私の所属する第一営業部と設計部などが入つていた。第一営業部は、一つ上のフロアにある。ちなみに合併前の私の部署は、さうに二つ下のフロアにあつた。

第一営業部が個人事業主など小口の顧客を対象としているのに対し、第一営業部は、大口の法人や、アジアを中心とした海外顧客を担当している。企画にも携わる、いわゆる花形部署だ。営業事務などをこなす内勤スタッフも、私がほぼ一手に引き受けている第一営業部と違つて、充実しているはずだ。

さつきの話だと、例の上司に叱責された後に、席に戻れず廊下に出たところがなんかを見られたのだろう。

「実は、ijiの店でも見かけたことがあるよ。思いつめたような顔をして座つてたけど、ラーメン食べ始めたら幸せそうな顔になつたから、ほつとした」

「うつ、それは痛い。そんな風に見えていたのかと思つと、顔に血がのぼる。

なんだかみじめになつてきて、田の前の彼に八つ当たりしてしまいたい。が、実際に怒つた顔を向けたりできないのが私だ。

それに、彼の声は穏やかで、馬鹿にされているような感じはまつ

たくしない。この調子で営業をかけられたら、あいつこうひく買つてしまつかもしれない。

顔を赤くしたままの私を見てまた罪悪感が呼び戻されたのか、彼は少し動搖しているように見えた。その動搖が私に伝染して、何か言わなくてはと焦つてしまつ。

「あの、今は一営ぢやないんですか？」

「ああ、うん。今は経理部。フロア 어디じるか、入ってるビルも別だね」

「一営は第一営業部の通称だ。一営から経理への人事異動なんて、普通にあるんだろうか。

もしかして、左遷？

でも、彼の表情に蔭りは見えない。

「ちょっとまあ、この性格ゆえにいろいろあつてね。でも俺、商品として経理ソフトを扱つたこともあつたし、経理は経理でおもしろいよ」

そう言つと、彼は立ち上がりつづけ給水機の方に向かつた。
その背中を目にしばりはじめて、あの人か、と腑に落ちた。

稟議書を上のフロアに届けに行つたときだつたが、その場の雰囲気がなんとなく異様に感じられたことがあつた。

そこにいた人たちが奥の部長席の方を気にしているのがわかると同時に、そちらから声が聞こえた。端然とした声というのがあるなら、そういう声だつた。

背の高い男性社員がこちらに背を向けて立つていて、部長に向かつて反論しているようだつた。

そのまつすぐな背中もまつすぐな声も、上司に理不尽な暴言をはかっても言い返せない自分には遠いものだった。

心の感度を下げて防御の体勢に入っていたためか、合併後の社内で「おじさん」とは、おおむねほんやりした輪郭しかもつていない。そのなかで、あの背中はくつきりと印象に残っている。

「はい、しょうゆラーメンね」

おじさんが私と彼の前にひとつずつ、湯気の立つラーメンを置いた。澄んだスープのあつさり味のラーメン。

「すいませんね、うちの甥っ子がこんなかわいい人をいじめてしまって」

思わず、かわいくなんかありませんと真顔で言ひやうになつてから、甥っ子という単語に反応する。

「この人、俺の伯父さんなんだ。たまたま寄つたら、伯母さんが腰を痛めて休みだとかであたふたしててさ。少しだけ手伝つてたんだ」「だからね、こいつにつけてきますから、今日のお代はいいですよ」「うん、そうしようよ。今までよっぽど話しかけようかと思つていたんだけど、今日は寄つてみてよかつた。ほら、冷めないつちに

金色のスープをひとさじ、れんげですくつて口にはこんだ。やさしい味が口いっぱいに広がつてから、じんわりと身体にしみこむのがわかる。

それは涙の味ではなく、ちゃんと幸せな味がした。

それからおじさんは、疲れたからとのれんを外してしまった。私を導いてくれた赤い光も、消してしまったのだろう。

どうせもう客も来ないよと言つてもいたが、私に気を使つてくれたのではないかという氣もする。

食べ終わつてから、私と彼は、ぼつぼつと話をした。彼はやはり、合併相手の会社から来た人で、私の一年先輩にあたるそうだ。意外にも、住んでいる場所がわりと近いこともわかつた。

さすがに上司の暴言のことは言わなかつたが、一週間後に退社が決まつたことも話してしまつた。こんな話を初対面に近い人とするなんて、私にとつては珍しいことだ。

彼はほんと黙つて聞いていたが、退社のことを話したときは、少し驚いた様子で、でも何かを察したようだつた。

「じゃあ、これから新しい」とばかりで、楽しみだね」「楽しみ?」

そんな安っぽい慰めの常套句、とは思わなかつた。

彼なら本当にそう思うのだろう。私だって、そういう可能性もないことはないと思える自分に驚く。

話をしているうちに、胸の奥に居座つていたまつ黒な塊が重みを減らしたようだつた。ここ最近では考えられなかつたほどに。

結局、代金は受け取つてもらえなかつた。なのでせめてこれくらいはと、テーブルや流しのまわり拭いたりするのを手伝つ。

彼はこれから備品の修理を手伝うとかで、遅い時間なのに私を送れないと残念がつてくれた。私の方は、話がてきて、こんなに気分を軽くしてもらつただけで、十分すぎるほどだつた。

これくらいの時間には店に顔を出すから、ぜひまた寄つてくれと彼は言う。寂れた店だけど、しょうゆラーメンだけはおいしいよね、

とも。

店を出ると、温まっていた気持ちが少ししぶんで、きちんと感謝の気持ちを伝えられなかつた自分をもどかしく思つた。

退社するまでの一週間、帰宅する頃には毎日のように、あのラーメン屋と彼のことを思い出してはいた。でも、あの店に入つて彼に会つたら、いろいろ情けないことを口走つてしまいそうな気がして、結局一度も足を向けることはなかつた。

今日は最後の出社日だつた。引き継ぎ書も完成し、私物もだいたい整理し終わり、あとは淡々と通常業務をこなした。

金曜日だつたから、暗くなる頃には週末特有の浮き立つような雰囲気がフロアに漂つっていた。

その雰囲気に反して、送別会も寄せ書きも一切なし。事実上のケビだという事實を改めて思わずにいられない。

二十一時をまわつたところで通常業務を終了し、周りの人へ挨拶をしてしまつた。例の上司は離席していたが、朝一で挨拶は済ませてあつた。

もちろん、営業先から直帰した人や、すでに飲みに繰り出した人もいたはずだが、気のせいいか、この時間にしては在席者が多い気がした。

一人ひとりに声をかけて挨拶していくと、普段ほとんど話をしたことがなかつた人から、思いがけず丁寧にねぎらわれることも多かつた。

「からもっと積極的に話しかけたりしていれば、もう少し居やすい環境をつくれたのかもしれないと思つ。相変わらず、私は気づくのが遅い。

でも今は、気づけて良かつたと思つ」としよう。

エレベーターを降り、ビルを出て顔に冷たい風をあびると、さすがに胸がいっぱいになつた。たつた三年ぱつちには違ひないけど

それから、ふわふわした布の上のよつな場所を、ずいぶん長いこと歩いたような気がする。

ふと我にかえつて辺りを見回せば。

またしても私は、例の暗い路地に入り込んでいたのだつた。

どうしようか。

立ち止つて逡巡していたところに、後ろから腕を強く引かれて思わず小さく悲鳴をあげた。

振り向くと、笑いかけのような顔をして、彼が立つていた。

まるで私なんかを見つけて嬉しこともいつよつ。

「ひどい人だな、もう」

「ほんと、すいません。でも驚きますよ、普通」

「そうじゃなくて。あれから一度も来てないんじゃない?」

「ええと、今日、きました」

彼は苦笑してる。

「今、引き返せりとしたるよつて見えたけど。ま、いいや。なんかこんなふうになる氣がしてた。それより今日は最終出社日じゃ……」

「ほんとこ、ずっと来たいと思つてはいたんですね」

「……うん、わかつた。じゃあ、今日はあの寂れたラーメン屋じやなくて、どこか別のところで打ち上げでもしようか」

私は少し考へてから言つた。

「いえ、できればしょうゆラーメンが食べたいです。一緒に食べてくられませんか?」

少し笑つて頷いてくれた。その顔を見て、自分はこんなにこの人に会いたかったのかと知る。

彼は先に立つて路地を歩きだす。道の先の赤い光は、彼の体に遮られて見えなくなつたけど、かわりにこのまっすぐな背中を追つていけばいい。

今日も密は他にいなかつた。その上、私たちを見たおじさんがあのれんを外してしまつた。

この店、つぶれてしまつんぢやないかと本氣で心配になる。けつこつ切実に、つぶれて欲しくない。

皿の前に置かれたラーメンのスープをすくつて口にふくむと、こじばがほりつと口をつく。

「ひなんにおいしいのこ・こ・こ

彼が声をあげて笑つた。店に入つた彼は、曇るしなくても困らないからと眼鏡を外していくて、少し印象が違つて見える。眼鏡が似合うと思つていたので、ちょっと残念だ。

「商売つ気がないからね。後継者もいなし。けどね、ちやんと固定ファンもいるから大丈夫、そんなにすぐにはつぶれないと思つよ」おばさんの姿は今日も見えなかつたが、厨房のおじさんも豪快に笑つてゐる。

そんな様子を見ると、今日でクビになつたことなんて、すぐ遠いことのように思える。

自分には何も残らないなどと、ずいぶんいい加減なことを思つてしまつっていた。胸のつぶれるような毎日の、その渦中では、もの凄く視野が狭くなつていたから仕方なかつたのかもしれない。

でも、自分には、健康な体もあるし、お金を使う暇も心の余裕もなかつたおかげで、当面の家賃の心配をする必要もない。

おいしいラーメンを作るこのおじさん、隣りにいる元先輩社員、私をねぎらってくれた人たち、自分の方から連絡を絶つてしまつた友人たち。

残つているものを見まわすと、自分はよくよくぜいたくな奴だと思える。

昔の友人にもこちらから連絡をとつてみよう。就職活動にもぼちぼちフントウしよう。どちらもダメもどで。いや仕事は遅くとも失業給付が切れるまでになんとか。

でもその前に、少し休んで自分を甘やかそう。客観的に見れば、暴言に抵抗もせず離職しただけの話。でも、甘ちゃんの私にとつては、なかなかきつい体験をしたのは確かだから。

おじさんが杏露酒をサービスしてくれた。あまり酒に耐性がない私は、少しだけをいただいて、お湯でわつてもうつた。おじさんが呆れながらも残りを飲んだ。

それから片づけを手伝つと、おじさんに手を振つて、彼と一緒に店をでた。

外の道を歩きはじめるといふと、さわざえと冷えた冬の空気がいきなり身にしみてくる。

残念なことに、さつきまでの楽しさの余韻に浸つてゐる暇はなかつた。どこからか降つて湧いたような気まずさが、あつさり空気を覆いはじめている。

無口になつた彼の様子に、徐々に不安がつのつた。焦つて話題を

探しても、店で何を話していたのかすら思いだせない。

人通りの少ない脇道に入ると、余計に何ともいえない気まずさが濃くなつて、左手を強く握り込みたいくなる。でも、今それをしてはいけないと思つ。

そのとき、軽く握つた左の手のひらと指の隙間に、彼の指がすべり込むのを感じた。親指以外の四本の指どうしが絡み合つ。彼が立ちどまつてしまつたので、私も足をとめた。

癖が出そうになつたのを気づかれたのか。ぎくしゃくと彼の方を窺うと、田があつてしまつた。

「爪、立ててみてよ」

「えつ？」

爪を、立てる? 」この状態で、といつか彼の指の上に?

「そんな趣味、私にはないです」

笑つて流そつとしたが、思いがけず彼の表情が真剣で、語尾がまいになる。

「俺にもないよ。どれくらいの痛みなのか、知りたいだけ」

そんなこと言われたら、余計に無理だ。

彼の声は静かなのに、言つてる内容が激しくそぐわない。

「できません」

「できる」

「その必要がないです」

もうこの話題は終わりだと下唇をかみしめる私を、眼鏡をしていない彼の視線は逃してくれない。今も曇った眼鏡をしていればよかつたのに。

「どうして、いつも・・・」

唐突につながれている方の手がひかれ、倒れ込むように傾いだ私の体が、彼のもう片方の腕だけで強く抱きしめられた。

速い鼓動が聞こえる、気がする。自分のと、彼のと。彼と話をしたのは、今日でまだ一度目。それなのに、そんな人の心臓の音を感じながら、いろいろどうでもいいほど、心がほどけてくる。

石橋をたたいても渡らない私はいつたいどこへ行つたのか。

でも、別にやけになつてゐるわけでも、淋しさに流されてるわけでもないと思う。

あの背中を目にしたときか、曇った眼鏡のいらつしゃいを聞いたときか、いつからかはわからないけど、私はずっと惹かれていた。それに、爪なんか立てなくたって、この人は知つてくれるので。私の痛かったことも、情けなかつたことも。

彼の痛かったことや情けなかつたことを知る人に、私も、なりたいと思つた。

腕の力が少しづるめられて、私はそっと息をはいた。そりいえば、この間からずっと、言いたかつたお礼を言ってなかつた。

「あの、ありがと。」

彼が驚いたように身じろぎするのがわかつた。自分で言つたことなのに、いきなりすきて意味がわからないのも当然だと納得してしまつ。

「何が？」

「いろいろまとめて。今日のことと、この前のことも。でも、」

背中がふつと寒くなつて、かわりにあたたかい手のひらが頬に触れる。

何がと聞いたのは彼の方なのに、聞いたその唇が答えの続きを遮つた。

遠慮がちだつたキスが、すぐにもぐるよつて深くなつていく。
左手をずっとつながれたまま、ひとぱのない時間が長くて、少し不安になつた。

だからといふか、やつぱり私の左手は、彼の指に爪を立ててしまつた。跡が残るほど強くではない、はずだけど。

その手を残して身体が離れてから、彼は黙つて空の方を指さした。振りあおいだ私の目に、まんまるから三日月の分だけ欠けた形の月が、黄色い光をこぼすのが見えた。

そして現在の私は転職活動中。無職生活中ともいふ。

履歴書をエントリまたは送付、面接にかすりさえせず落とされる、
「の黄金の繰り返しパターンは、すでに新卒のときに経験済みだ。
面接はさうに気が重いが、あの合併後の日々を思いだせば、多少
のことは我慢できるという副産物に恵まれてもいる。暴言上司に感
謝すべきだらうか。しないけど。

「の生活で、いつもがまったく溜まらないといえば嘘になるが、
私には嬉しいいつも回避策があった。あのラーメン屋を少しだけ
手伝わせてもらっているのだ。

おばさんは店に復活を果たしたのだが、遅い時間になるとまだ辛
いという。だから、夜の数時間だけ、店に通っている。

といつても片づけや洗い物専門なのだが、嫌でも人と接することができ

初日なんかは「いらっしゃい」を言つタイミングがおかしなこと
になつていて、最近では私目当てで客が増えた、などとおじさん
が言つてくれている。全面的に嘘くさこけど、そういうことにして
おひや。

もちろん、報酬がおこしそうなラーメンであることも外せない。

そして、「の店の店主の甥御たどと、現在お世話をせせて
ただいている。

彼はこの「の、仕事がかなり忙しいらしい。うまく私にも仕事
が見つかって、あっぷあっぷするようになつても、そういうことが
原因で自然消滅なんてことにはならぬようにしておきたいと思つ。

もし別れるとしても、前みたいに自然消滅ではなく、ちゃんとし
た理由が欲しい。

・・・それにしても、付き合に出したばかりで別れを考えずいられないこの性格は、もう少しじどうにかなってくれるのだろうか。

陽が落ちる頃、赤い看板の小さなラーメン屋をめざして歩く。さすがにもう迷子にはならない。

向こうに見える空の色は不思議なグラデーションをつくりていて、夕焼けと、月と、星が、同居していた。

空はいつもあつたのに、この数カ月はそんなことも忘れていたらしい。彼に出会わなければ、今でも思い出せないままだったのだろうか。

でも、あの背中を見つけたのは私の方が先のはず。廊下で握った拳を心配してくれたのは、絶対それより後だと思つ。

あのとき遮られた「でも」の続きを後で伝えたら、わりと負けず嫌いだよねと笑われた。拒絶のことばが続くと思つたのだと彼は言う。まだまだ、彼については知らないことがいっぱいだ。

今日の円は三田円。今は、手のひら三田円はない。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339ba/>

手のひらの三日月

2012年1月5日23時48分発行